

7. 助けるためには助かること

これまでの経験で、我々が災害発生した中で、普段できないことが神業的にできるということはありません。多くの場合には、どうすればよいのか、情報が拡散される中で途方に暮れてしまいます。また、逆に都合の良い情報に頼ってしまって避難が遅れたり、危険域に入ってしまうこともあります。このような人は、先が見えないというか起きていることが想定外で思考停止に落ちいってしまいます。そうならないためには、ここで冷静に現場を判断して行動できる必要があります、自分がまず安全であること、安全が確保される状況の中で安全に導ける人にならなければなりません。そのためには、どうすれば助かる人になれるのでしょうか？それには災害を理解して、何が起きていて、これまでの経験からするとどう展開しそうなのかを、情報等で確認しながら判断できることが必要となります。

災害弱者とは、危険が差し迫った時に、その察知が困難、あるいは察知しても避難が困難な人、または危険情報を得ることが困難、あるいは情報を得ても適切な行動が困難な人を行います。そして対象となる人は、障害者、傷病者、高齢者、乳幼児、妊婦、旅行者ですが、実は一般の方の誰もが弱者になる可能性があります。

これまでの災害で指摘されているのは、災害が発生しても自分は大丈夫という心理状態になってしまうことがあります。これまで災害があったことを聞いていない、警戒区域だということを知らなかった、まさかここまで水が来るとは信じられない、普段は水がない沢だった、水はあつという間にきた、川から離れているので安心していたというようなことを聞きます。このようなことがないようにするためには、まず自分が暮らす地域がどのようなところなのか、これまでどのような災害の履歴があったのか、ハザードマップで確認しておくことが必要です。

一人一人が適切に行動して安全を確保するということは、助けを待っている人に余裕を持って対応できることとなりますので、ここで地域力を活用して共助に全力を尽くすことができます。その結果、公助にも余裕が出てきて費やすエネルギーの縮減につながって、その後の復旧もスムーズに移行することができることにつながります。

自分が助かるということは自分だけでなく周りの多くの人へ手助けができますので、人手不足と迅速性が求められる災害発生時に極めて重要なこととなります。

まずは、一人一人が自分の地域の災害リスクについて積極的に理解して、各地で発生する自然災害へ関心を持って、自分の地域に当てはめてシミュレーションして考える習慣が必須です。そのために、ハザードマップを確認して理解しておくことが近道のような気がします。そして、このハザードマップについては、地域で学習、研修をしてほしいと思います。このハザードマップには様々な有益な情報が詰まっていますので、その見方と活用の仕方を身に着けることは、自助力も共助のための基礎力を錬成するにも有効なことで、そのための研修会を地域の自治会や町内会に働きかけ実現してほしいと思います。